

平成22年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 キチジ

学名 *Sebastolobus macrochir*

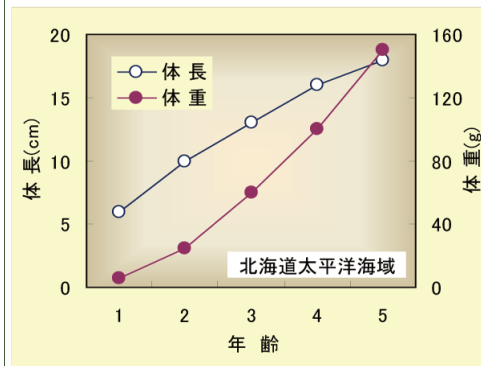
系群名 道東・道南

担当水研 北海道区水産研究所



生物学的特性

寿命: 不明
成熟開始年齢: 3歳
産卵期・産卵場: 春季(3～5月)、産卵場は恵山海丘、襟裳岬沖、釧路沖、落石沖の山状の地形の周辺(水深400～850m)
索餌期・索餌場: 北海道太平洋側沖合の一帯に分布し、主な分布水深は300～900m
食性: クモヒトデ類、ヨコエビ類、オキアミ類、エビ・カニ類、多毛類、魚類など
捕食者: マダラ、アブラガレイ、共食い

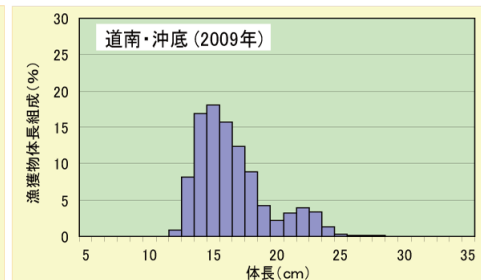
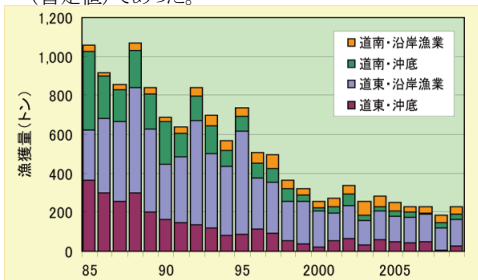


漁業の特徴

沖合底びき網(沖底)の他、えびこぎ網(旧エビ桁網)や刺し網などの沿岸漁業により周年漁獲されている。近年の漁獲量は、沖底よりも沿岸漁業の方が多。また、道南よりも道東で漁獲量が多い。

漁獲の動向

道東と道南における沖底と沿岸漁業の漁獲量は、長期的には減少傾向にある。1985年まで1,000トンを超えていた漁獲量は、1997年に500トン进行込み、1999年以降は200～300トン程度にまで減少した。2009年の漁獲量は227トン(暫定値)であった。



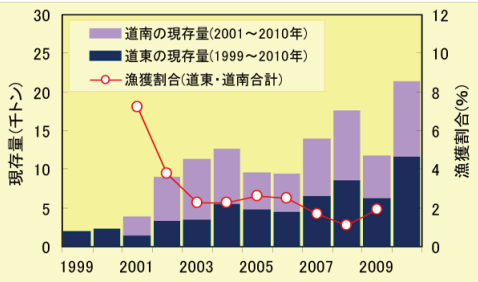
資源評価法

漁船は必ずしもキチジ狙いの操業をしているわけではなく、漁獲努力量が把握できないことから、漁業データとしては、漁獲量の経年変化と漁獲物の体長組成を評価に用いた。また、漁船漁獲物から採集した標本と銘柄別水揚げ記録を用いて、漁獲物の体長組成を推定した。さらに、1999年以降は底魚類を対象としたトロール調査により、調査海域におけるキチジの現存量を推定しており、これを近年の資源量の指標値として利用した。

資源状態

各海域の漁業種類別の漁獲データがそろい1986年以降の過去24年間(1986～2009年)の漁獲量から、現在の資源水準は低位と判断された。また、2006年以降5年間の現存量推定値の変化から、資源動向は増加傾向と判断された。漁獲割合は1.1～7.2%と低い値となっているが、これは漁場となっていない水域(特に漁具の届かない深い水域)の現存量が含まれていることや、キチジは群れを作らず単独でまばらに分布することが多いので、効率的な漁獲が難しいためと考えられる。しかしながら、キチジの成長が遅く、毎年の生産量が小さいことを考慮すると、資源に対する漁業の影響が小さいとは言えない。





管理方策

漁獲量と現存量推定値の変化および漁獲物の体長組成から資源状態を判断し、漁獲量に適切な係数を乗じた値をABCとする。調査船調査の結果から得られた関係式により、2011年の現存量は21,232トンと推定される。2006～2009年の現存量平均値に対する増加率は1.62である。資源の主体となっている年級群の成長が、今後鈍化する可能性を考慮し、漁獲量の増加を資源の増加率の半分程度に抑えることにより資源水準の回復を図るため、2006～2009年の平均漁獲量219トンに1.3をかけてABClimitを算出した。資源動向は増加傾向だが、現在の資源が極めて低い水準であることに変わりはない。未成魚が成熟するまで獲り残し、再生産に振り向けることが、資源状態の改善に有効に働くと期待される。

	2011年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	285トン	1.3Ccurrent	—	—
ABCtarget	228トン	0.8・1.3Ccurrent	—	—

- 年は暦年(1月～12月)

資源評価のまとめ

- 現在の資源状態は極めて低い水準にある
- 近年、資源は増加傾向にある
- 漁獲割合は低いが、資源に対する漁業の影響が小さいとは言えない

管理方策のまとめ

- 漁獲努力量の削減が必要
- 未成魚が成熟するまで獲り残し、再生産に振り向けることが、資源状態の改善に有効に働くと期待される
- キチジの餌生物が生息可能な海底環境の保全・復元を図ることが、資源回復にとって不可欠

執筆者: 濱津友紀

資源評価は毎年更新されます。